



サウナで本を読む人

総合文化学科 教授 宮田 暉朗

「一日に四回の飯を食え。一回は読書という飯だ。」とは妙言だが、朝日に広告「ヒトは本を読まねばサルである。」が出た。コンクリートの猿山で、裸のヒト60人のバナナ争奪の悲喜こもごもの表情を一番上の檻外で二人の子供が見る図である。一番左にしゃがみこんで思索中の女性を配してテーマを強烈にしている。人間観察者の紀貫之は、食べ物・着る物・住む家に薬を加えてこれらに不自由しない人が富める人だと述べているが、本こそヒトたるの食べ物であり薬だと意識しても怒りはしないだろう。ところで、大辞典は古代語・帰化語・方言・隠語・敬語・卑語・共通語等を集録してその語数は72万語あるらしい。この野菜を使った料理である本が、生きるための術改善の栄養素として作用し、儒教でいう「四端の心」にかない、人の行為の正しさを促すエネルギーとして体内を巡るのだ。

最近の飯は心学・儒教・中世文学・漢詩・教育書・古代文字等々を必要に迫られての濫食だが、キラ細胞をやっつける宇治拾遺物語・安楽庵策伝の醒酔笑、落語集・昭和の中間小説などをさらりと触読？して、人情の深さに涙したり、げらげらと笑って食している。

閑話休題。夏休み中に驚いたことが2つある。一つは、温泉のサウナ室に30代の男性が左手に本を持ち入って来られて90度の熱湿風の中で読み始めたことである。衝撃が直ぐに敬意に変わるのに時間は要らなかったが、その理由の不問は稀にみる悔恨だった。

他は、介護体験のお礼の帰途に古物販売店で「赤ちゃんの名前のつけかた・各国の政治制度・トホホな日本語・自分のための人生・心なおしはなぜ流行る・生きがいの創造・古典・心理学関係」等を120冊ほど購入した。何と1冊10円で、多くが過去に売られた証拠である105円等のラベルが貼られていたので、流通文化のしたたかさに嘆賞しつつも、かの値段については本への同情が嬉しさをいささか上まわってしまうのだ。

幼児期から興奮した父に「本を食べる時、ご飯を読むな！」と叱られた

た如き癖性者はヘッセの「少年の日の思い出」の蝶の盗みの心情が理解できる一方で去年、本のマニュアル通りに甘藷を植えて巨大な葉を収穫、今年は83歳の熟練者の援助で大収穫した。戦国策「以書為御者、不尽馬情」は、馬の御し方の知識だけでは気持ちが不明故、共に生活して体得せよという機微看破で「新鮮な知見・情感を応用して実にする。」と同義の教えである。

最近「宇宙・人・本」から心の動く糸口である心緒を見出して眼を開き、美・勇・喜・崇・力等に満ちた惻隠の情を以て体魄を生気、憤興させて心身の錆びつきは願わない。

目次

サウナで本を読む人
感情を読み解く心理学
本の読み方考
みつやくんの想像力と支援者の専門性
本学教員の新刊著作
本の魅力
絵本が導いてくれた図書館、そして夢
図書館利用の軌跡 そして夢、
本の世界を広げる
図書館ガイド
図書館ニュース 第13回七夕文学賞

CONTENTS

総合文化学科 教授	宮田 暉朗	1
幼児教育学科 専任講師	長檜 涼子	2
幼児教育学科 准教授	市東 賢二	3
幼児教育学科 専任講師	大谷 誠英	4
		4
幼児教育学科 1年	池田有美香	5
幼児教育学科 2年	中澤 宏美	5
総合文化学科 1年	棚岡智恵子	6
総合文化学科 2年	徳永 直子	6
		7
		8



感情を読み解く心理学

幼児教育学科 専任講師 長櫓 涼子

近頃、私が心理学を専門とすることが話題となると、「先生はメンタリストですか？」とか「私の心なんてお見通しでしょうね。」と言われることが多くなった。ここで、読者の皆さんに想像してもらいたい。果たして私は他人の心を自由自在に読んでいるのだろうか。

容易に考えられることだが、私が人の心など読めるはずもない。「人の心」なるものが人体の何処に存在するのかも未だに分からないでいる。

しかし、心理学的な知見に立てば「人の心」は行動に現れる。だから、相手の行動をよく観察することで、何となくだがその人が考えていることが読めてくる。特に人の感情は本人も無意識のうちに、しぐさや表情などの外見に現れる。例えば、女性が喉もとのくぼみを押さえたり隠すしぐさは不快な感情をなだめるしぐさと言われ、同じようなことが男性の場合だとネクタイを直すしぐさに現れる。また男性の場合は、女性に比べよりしっかりと喉もとを手で覆ったり、喉もとをマッサージするなどのしぐさが見られ、これは極度の緊張をほぐそうとする行為と考えられている。

また、心理学の中には感情心理学という分野がある。この分野では、1960年代より欧米の心理学者を中心として、人の感情がどのような表情として現れ、それを他者はどのように理解するかを明らかにする試みが行われてきた。特に有名なのがポール・エクマン(Paul Ekman)だ。エクマンは感情と表情に関する先駆的な研究を行い、20世紀の傑出した心理学者100人に選ばれた。アメリカの連続テレビドラマ『Lie to me ~嘘の瞬間』の主人公ライトマンのモデルとなった人物である。

ポール・エクマンの研究によると、人には人種や文化を問わず万国共通した感情とそれに対応した表情があると言う。それが、「怒り」、「軽蔑」、「嫌悪」、「喜び」、「悲しみ」、「驚き」、「恐怖」の7つで、これらは「基本感情」と呼ばれる。

相手がどのような感情状態にあるのかを知りたいならば、相手の顔を見て表情の変化に注目するとよい。基本感情の中でも、「怒り」の表情は0.1秒という瞬間的な提示でも他者から認識されやすい(佐藤・吉川,1999)。この瞬間的な感情提示は、感情を示す本人も殆ど無意識のうちにやっている反射行動だ。この変

化に気づくことで相手の感情状態をうかがい知ることが出来る。

しかし人の記憶とは不思議なもので、感情を示す表情の中でも、「怒り」より「喜び」の表情を記憶に長く留める習性がある。つまり、我々は怒りという不快な感情には敏感であっても、それを長く記憶に留めたくないようだ。従って、相手に良い印象を持って頂くには笑顔でいる方が良いのだが、作り笑いも相手に見抜かれやすい。私たちには日ごろから様々な体験を通して、心から喜びを表現できる人間性を身につけることが大切なだろう。

秋の夜長、皆さんにはぜひ一度、ポール・エクマンの感情に関する本を読んでいただきたい。

参考文献

- 『表情分析入門-表情に隠された意味をさぐる』P・エクマン/W・Y・フリーセン(著)、工藤力(訳編) 1987 誠信書房
『顔は口ほどに嘘をつく』ポール・エクマン(著)、菅靖彦(訳) 2006 河出書房新社
『感情科学』藤田和生(編) 2007 京都大学学術出版会
『FBI 捜査官が教える「しぐさ」の心理学』ジョー・ナヴァロ、マーヴィン・カーリンズ(著)、西田美緒子(訳) 2010 河出書房新書



本の読み方考

幼児教育学科 准教授 市東 賢二

我々大学の教員は教育者としての役割もさることながら、研究者としての役割を主たるものとしている。とりわけ研究は教員それぞれのアイデンティティでもあるから、その背景やよって立つ基盤、いわば方法論を無視できない。一昔前のような学派や流派などは影を潜めているが、無視できないものである。学派や流派がことさらに問題視されなくなった背景には教員に対する社会的要請が、研究そのものよりも教育に傾いてきたということと、私は嫌いだが、折衷派と自認する研究者が増えたことが大きな要因ではないか。現実的なことを持ち出すならば、過去の良書がどんどん絶版となり、入手困難になってしまった挙句、無視されるようになってしまったことも付け加える必要があるかもしれない。

本来折衷主義の学者たちは方法的に折衷であり、方法論的にはむしろ学的背景が明確であった。そうだからこそ基盤たる方法論と研究者本人の天才性によって、方法的な自在さが確保されていた。その意味からすれば折衷派を自称する研究者には注意が必要だ。研究者ではなく半可通(研究オタク)か評論屋(研究者風)の可能性が高い。本来的な研究の基盤たる方法論を持たないため、井の中の蛙的(しかも頑固)な主観主義者であることが多いのだ。

院生だった当時、指導教授や先輩方には随分問い糺されたことがある。それは基礎文献は何か、あるいは論旨を支える背景は何かということである。そこでは方法論を問われていた。一般的にはある論文を書こうとする場合、そのテーマを扱うための資料(データや文献)が問題となるが、それは表向きのことであって、実はその論旨を支える背景になるための、①資料(データや文献)は何か、②資料をどのように扱ったか、または読んだか、さらに③研究者自身の方法論は何かへと迫るための布石なのである。

論文として読む価値があるかどうかは注釈と文献一覧を見ればわかる、とよくご指導いただいた。タイトルがいかに魅力的でも、注釈と文献を見ることで論文としての第一歩、上述の①がいつも簡単に見破られてしまう。つまり下手な注釈と文献一覧を晒せば、己の

勉強不足を告白することになる。同業者が同業者に辛いのはどの職業でも同じである。

手段や方法という言葉は目の前に取り扱う対象があり、その対象に合わせて働きかけることを意味する。その意味ではあくまでも対象論である。対象が変われば手段や方法も変わる。①ではこうしたことが明らかになる。しかし方法論とはなぜその手段や方法を選んだのか、ほかの手段や方法はどうか、取り扱うための常識やルールは何かといった、取り扱う人の態度を含む総体として理解する必要がある。つまり②、問題意識や資料あるいは文献をなぜそのように読んだのか、なぜそのように解釈したか、といったことが問題になるのである。数的データはそれ自体では何も語らない。ひらがなや漢字、あるいはアルファベットが読めたからと言って、それは文献の読解にはならない。そこに意味や概念を読み取り、そこに示された内容を明らかにすることが必要なのだ。そこで③が問題となる。

このためには読み解いた研究者自身の問題解決への学的態度が明らかであることや、目の前のデータや文献にいかにかコミットしているかが問題となる。方法論が学問的視点として理解されることがあるのはこのためである。残念ながら方法論は一朝一夕には身につかない。方法論は時間をかけて身に着けるその人自身の生き方を含む問題なのだ。

現代という時代は、インターネットをはじめ便利さにあふれているが、あまりにも便利で、選択肢が多岐にわたりすぎるあまり、総体として理解しようとすることを放棄してしまいかねない。「読む」ことだけを取り上げても書物に限らず、様々なものを読むことができる。だからこそ何を読んだのかという対象論だけでなく、なぜそれを選んだのか、また、どのように読んだのかという方法論にもう一度立ち返る必要があるだろう。

参考文献

足立 勲『臨床社会福祉学の基礎研究』学文社 1996
内田 義彦『社会認識の歩み』岩波新書 1971

みつやくんの想像力と 支援者の専門性

幼児教育学科 専任講師 大谷 誠英

保育士をはじめ、対人支援を行うことを専門とする職員には想像力が必要不可欠である。なぜなら、支援の対象となる人々は、日常生活において何らかの問題を抱え、さらに問題自体を明確に認識できておらず混乱状態にあるといえる。そのため、支援を展開するためには、アセスメントとして支援の対象者が抱える問題状況を正確に把握しなければならない。しかし、そうした状況を聞き取るうえで対象者の口から語られる内容が、問題を正しく表現しているとは言えないのである。

こうした状況に対し、専門職は限られた情報から状況を想像した上で、具体的な支援を計画するのである。つまり、欠けたパズル(情報)のピースを想像力で補い埋めていくような作業である。

筆者は実際の支援現場において児童と関わってきた。そうした現場では、様々な児童が存在し想像を絶するような過酷な環境で生き抜いた児童も多い。彼らと関わる上でコミュニケーションを成立させるには想像力を最大限に発揮しなければならない、それが出来なければ信頼されるなど不可能であったといえる。筆者がそうした中で何とか想像力を発揮し、児童と関係を構築できた背景に一冊の本がある。

『みつやくんのマークX』筆者が小学校低学年の時、近所にあった図書館で見つけた本で、特に人気があったという本では無かった。しかし、筆者は何度も借りて何十回と読みあさった記憶がある。

この物語は、主人公のみつやく君が車を設計する所から始まり、その車は陸・海・空とあらゆる状況に対応

する高性能な車でマークXと名付けられる。設計内容はエンジン・プロペラ・スクリュー等が具体的に描かれ、理論の説明も加えられている。とても小学校低学年向けの本とは思えない高度な内容である。こうした理論に裏打ちされたマークXが走り出すと、実際に空を飛び、水上を走るといった内容で筆者の幼い胸は高鳴った。

そして、物語の最後は全てがみつやく君の「想像」であったと締めくくられる。この物語で作者が伝えたいのはマークXの性能ではなく、みつやく君の想像力である。さらに、専門的な知識に裏打ちされた、実現性を含んだ内容である。筆者はこうしたみつやく君の想像力に可能性を感じずにはいられない。特に、知識に基づく具体的なイメージを持った想像力とは、対人支援において、さらにそれを業とする専門職としての土台を形成するものである。対人支援において、対象者に共感出来るかどうかは、専門職一人ひとりの想像力にかかっている。

しかし、この想像力は無限に拡散していく性質も持っている。その結果、支援計画において予測されるリスクの多さ・大きさを想像すればするほど計画そのものがまとまらない場合もある。こうした状況では本末転倒であり、支援者としては失格といえよう。そのためにも、専門的な知識を豊富に身につけ、無限の選択肢の中から対象者にとってより良い選択肢を提示できるかどうか、そのための想像力が備わっているかが問われてくるのである。



2012年 本学教員の新刊著作



(今年発行の単独書・共著・分担執筆) 著者の五十音順

* 長田真紀先生

『原爆の子』をうけついで 『原爆の子』をうけつぐ会(編) (本の泉社)

2012年8月6日出版

840円 ISBN:9784780706703

(分担執筆)

* 西山秀人先生

『週刊朝日百科 絵巻で楽しむ源氏物語』(朝日新聞出版)

20号 朝顔「平安の大辞典 物語に登場する四季折々の草花植物(春・夏)」

2012年4月19日発行

26号 常夏「平安の大辞典 『源氏物語』を彩る秋と冬の草花

『源氏物語』の植物(秋・冬・通年編)」

2012年6月17日発行

(分担執筆)

『和歌文学大系 三十六歌仙集(二)(和歌文学大系;52)』(明治書院)

2012年3月10日出版

13,650円 ISBN:9784625424090

(共著。「順集」の校注を担当)

『源氏物語と儀礼』(武蔵野書院)

2012年10月31日出版

18,900円 ISBN:9784838602643

(共著)

本の魅力

幼児教育学科1年 池田有美香

私を感じる本の魅力とは、今の自分に必要な言葉と出会えたり、知識を身につけられるだけでなく一つの言葉やシーンによって人それぞれ感じ方が違うことを知るきっかけになることです。

最近私が買った本に『置かれた場所で咲きなさい』（渡辺和子著）という本があります。その本に出会った時、私は自分が保育士として本当に子どもと向き合っているのか、授業や実習を通して不安に思っていました。そう思っていた時に会った本で、題名が気になって読み始めたところ、私の心の支えになる言葉が沢山書かれていました。中でも、題名にもなっている「置かれた場所で咲きなさい」という言葉を見たときに感じたことは、自分の置かれた場所を受け入れ、自分らしくいるということです。子どもが好きということだけでは務まらない仕事だからこそ、保育園や幼稚園の現状を学び、子どもへの支援を考えなければ必要な保育が見えてこないと思うようになりました。子どもに必要な支援とはとらえ難い面もありますが、授業や実習などを通して、現実の問題を一つずつ見つめ

ることが出来、解決法について考えられると思います。

八月には、初めての实習がありました。運動会の練習で忙しい中、実習最終日に絵本の読み聞かせをさせて頂きました。読んだ本は、『こんとあき』（林明子著）という絵本です。私が小さい時から家にあり、私はこの絵本が大好きでした。本の中で、ぬいぐるみの「こん」が、「あき」という女の子と毎日遊んでいるうちに、だんだん古くなって腕や足の縫い目が綻びてしまいます。砂丘町にあるおばあさんの家まで、「こん」と「あき」は旅に出るのですが、途中で「こん」が犬にさらわれてしまう場面があります。大人の私が面白いと感じる所が、子どもたちは怖く感じていました。そういう解釈もあるのだとその時初めて気が付きました。

このように、本はその時の私に必要な言葉を与えてくれたり、普段気付かない感じ方の違いを知るきっかけにもなってくれました。皆さんも図書館や本屋さんに行ってみてください。きっと素敵な本と出会えると思います。

絵本が導いてくれた図書館、そして夢

幼児教育学科2年 中澤 宏美

保育者を目指して上田女子短大に入学してからあっという間に月日は経ち、早くも学生生活もわずかとなった。入学して半年間は数回しか利用していなかったが、気付いたら授業や実習、卒業研究などで図書館を利用することが多くなり、ちょくちょく行くようになった。私の場合、きっかけは絵本だった。絵本コーナーには、誰もが知っている絵本から初めて目にするものもあり、こんなにも多くの絵本が置いてあることに驚いたことを今でも覚えている。2年生に進級してからは保育についての資料を探しに行ったり、友達と読み聞かせはどんなものかと一緒に頭を悩ませたこともあった。今年の夏休み前には、長新太さんの『キャベツくんシリーズ』とも出会うことができた。気になって図書館で借り、保育実習で担当したクラスで読んだら、子どもたちの大好きな本となった。毎回読み終わると子どもたちから「明日はこれがいい！」とリクエストするようになり、「先生、キャベツくん持ってきた？」と毎朝尋ねられるほど子どもたちにも気に入ってもらえ、全シリーズを実習期間中に読むこ

とができた。彼しか描くことのできないユーモアあふれる世界を、子どもたちも私も楽しめ、お気に入りの絵本となった。

また、紫苑寮の寮長として後輩から実習の相談を受けたこともあった。今までの経験はもちろん、自身が図書館で読んだ本を参考にと薦めたり、読み聞かせで悩んでいる場合も、図書館に行ってみたら何かあるかもしれないよ、と声をかけた。私自身がまだアドバイスできる程でもないが、役に立つことを伝えることができたのなら嬉しい。

実習を通して、絵本を楽しく読んでくれる先生の周りには、いつも子どもたちが自然と集まり、じっと見つめて絵本の世界を楽しんでいる子どもたちの姿があった。まずは保育者が絵本を好きにならなければ、子どもたちにも伝えることはできない。卒業までの日々を大切にして勉強をさらに深め、絵本の楽しさを子どもたちに伝えることのできる保育者になりたいと思っている。



図書館利用の軌跡 そして夢、

総合文化学科1年 棚岡智恵子



日曜日の午後になると、一人の高校生が自転車に乗って上田市立図書館にやってくる。

本を物色したり、ソファで雑誌を読んだりして、西側の窓に夕日が差し込む頃、帰って行く。この高校生は四十二年前の私である。

この頃から、私と図書館の付き合いが始まった。しかし二十代は図書館に足をふみ入れた記憶はない。多分本を読む以外に、楽しい事があったのだろう。

私が本格的に図書館を利用するようになるのは、子育てが一段落した三十代後半からである。一時期は活字に飢えていた。子育て中は、寝る前に新聞を読むのが精一杯という時期が長く続いた。現在は読書できる時間はあるのだが、短大の勉強がらみの読書が多く、自分の楽しみとしての読書はおあずけ状態である。

今、利用している図書館は本学の図書館はもちろんだが、他には長野大学と上田市立図書館の二つだけになっている。長野大学の図書館は、社会人も利用できる。

以前、図書館のオンライン化が整うまでは、クレジッ

トカードの枚数より、図書館のカードの枚数の方が多様な時もあった。東北信地方の図書館は、行かない図書館を数えた方が早いと思う。古本も好きなので、神田の神保町にも二回ほど出掛けて行ったが、そこまで大風呂敷を広げなくても、今の私の勉強は図書館の本で充分だと思っている。これからも図書館を大いに利用していきたいと考えている。

そして最後に六十代の私にも夢がある。今考えた夢ではない。十年以上前に、井上ひさしの『本の運命』という本を読んで以来の夢である。この本に書かれている、井上ひさしの蔵書、十三万冊を集めた図書館が、井上ひさしの故郷である山形県川西町にある。

正式には図書館ではない。個人の蔵書だけなので、文庫なのである。名前は「遅筆堂文庫」。上田女子短大を無事卒業して、お金とひまができれば、この文庫のある山形県川西町を、ぜひ一度訪れたいと思っている。



本の世界を広げる

総合文化学科2年 徳永 直子



私は、短大に入って図書館を利用する機会が増えました。私にとって本は、自分の好きなことや興味のあるものを探究できる知識の世界です。本を読むことで自分の視野を広げ新しい世界を見ることが出来ます。もしあなたが、胸が躍る時、鬱積している時、そんな時に、本を開いて読んでみると広い世界と出会うことができます。私にも本を探している時に、はまって読み込んでしまった本があります。

その本は、ブラジルの恵まれない子供たちとの交流をしに、ボランティアに行った日本女性の目線で書かれていました。そこには自分が今まで知らない現実があり驚きました。そこにいる子ども達の叫びや願いが書かれていました。また、現実には子ども達は学校へ行かれず路上暮らしで警察官に殴り殺されたり、低賃金で労働させられたり、シンナーを吸っていたり、お金をねだったり、教育が受けられないために、読み書きができず、まだ青年同士で子どもができてしまったり、様々な問題がありました。家に帰っても大勢の兄弟がおり、学校よりも働きに出なさいと親から言付けられ、ボランティア施設に入っても、また路上生活に戻って

しまうということが書かれており、知らない現実の世界が見えた気がしました。

図書館で利用して読んだ本で、もう一つは『夜と霧』（ヴィクトール・E・フランクル著）という本です。こちらはドイツ強制収容所であった現実の話です。映像文化論の講座で「Life Is Beautiful」という映画を観ました。この映画はラブストーリーですが、ドイツの強制収容所のことが歴史的背景に書かれています。登場人物の子ども姿は、本を読んでそこまで想像していなかったことでした。映画を見る時も、本を読んで環境の悲惨さを知ること、そこで実際に暮らしている人やその感情や日常生活をより深く見ることが出来るのだなと思いました。

今までと違う分類の本を読むと、いろいろな知識がつき、好きな物語も違う世界を見られると思います。一人で本を読む時間を作ってみたいはいかがですか。ぜひ図書館に足を運んで、たくさん本を読んでみてください。私もこれからたくさん本を読み、図書館を利用していきたいです。

図書館ガイド

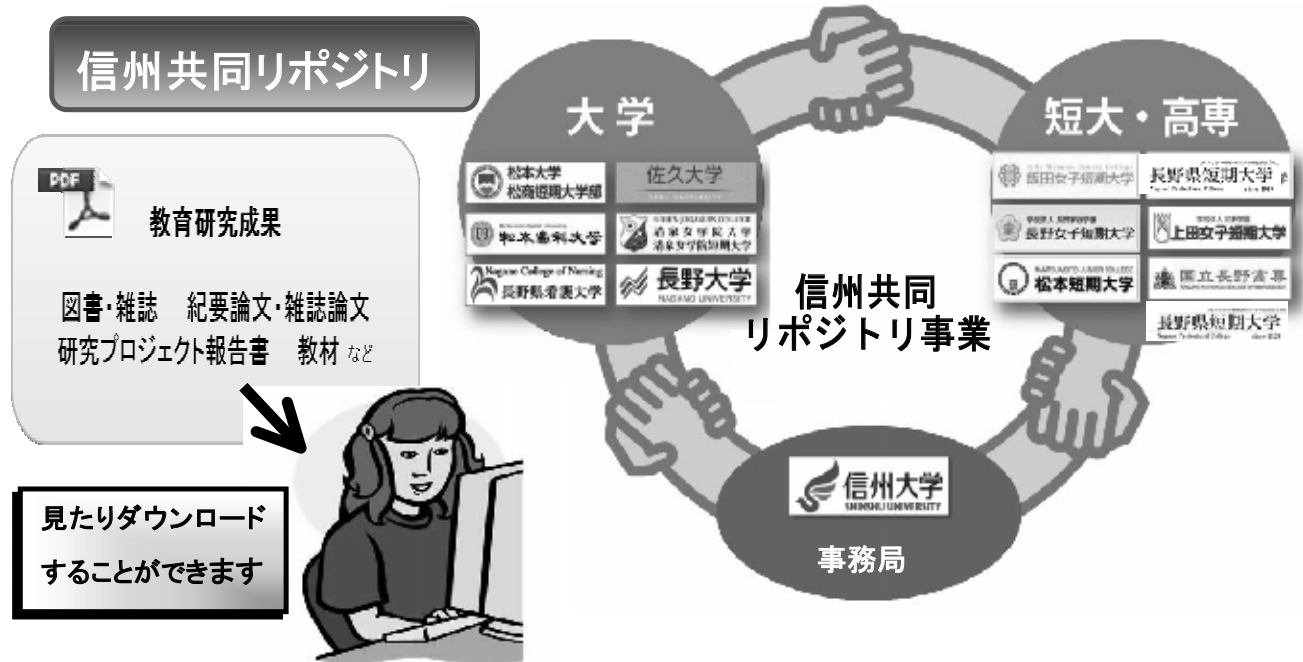
上田女子短期大学リポジトリ 8月に本公開開始しました。
<https://uedawjc.repo.nii.ac.jp/>

「紀要」「児童文化研究所所報」「観光文化研究所所報」などの論文をインターネット上で公開。
多くの方に見ていただけるようになりました。

上田女子短期大学リポジトリ



上田女子短期大学は「信州共同リポジトリ」に参加しています。(県内の大学・短大・高専の14機関参加。)
信州共同リポジトリ・ポータルサイト <https://shinshu.repo.nii.ac.jp/>



図書館 ニュース

第13回 七夕文学賞

◆恒例となりました七夕文学賞も、
本年は左記のみなさんの作品が受賞となりました。

優秀賞

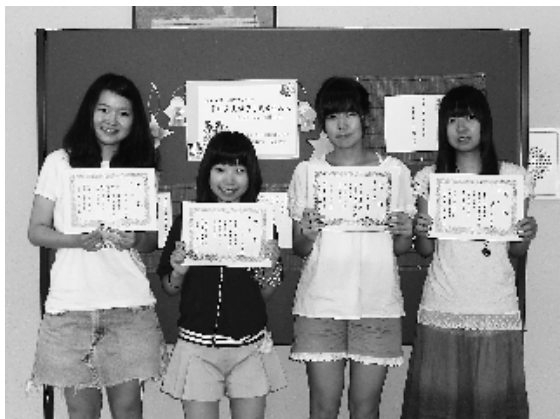
俳句

幼児教育学科 一年 岡田 はる菜
真夜中にかすかに香る日焼け止め

佳作

俳句

幼児教育学科 二年 依田 彩佳
指先で夏を感じる千曲川



佳作

自由詩

幼児教育学科 一年 浅野 あいみ
甲子園野球
出場選手はみんな年下
一年しか経っていないのに
昨年より何倍も
年をとった気がして
さみしい

佳作

自由詩

幼児教育学科 二年 津幡 浩美
同窓会
「離ればなれになるの
寂しいよ」
「また遊ぼうね」
そう言ってそれぞれの
夢へと歩き出す
今までの君とは違う君
私の知っている
あの頃のままの君
君も私も戻る思い出の場所
戻る時間 戻る記憶
早く会いたい
早く来い夏休み

※選考・添削は、大橋敦夫図書館長

編集後記

a postscript by the editor

「ウインドウズ8」が発売されました。教科書がタブレットになる日も、そう遠くなさそうです。教科書の手ざわりをなつかしむ大人の姿も遠くなるのでしょうか。
大橋敦夫

みすず

第39号

上田女子短期大学附属図書館報
2012.12 発行

編集：上田女子短期大学図書館紀要委員会
発行：上田女子短期大学附属図書館

〒386-1214 長野県上田市下之郷乙620
Tel：0268-38-6019 Fax：0268-38-6019
E-Mail：lib@uedawjc.ac.jp